

# PHAYAO レポート 2011-04 (スタディツアーレポート)

## シャンティ山ロスタディツアー報告書

平成 24 年 3 月 1 日～4 日、9 日～12 日

「シャンティ山口の活動、モン族の家にホームステイ、シャンティ寮への訪問」

徳島大学 医学部栄養学科 1 年 梶浦大資

### 「シャンティ山口の活動の見学」

今回、私はタイで精力的に活動されている佐伯さんの活動に同行しました。私が今回訪れたモン族の村では、佐伯さんが考案されたエコトイレと呼ばれるものを使用しています。

日本では石油枯渇が迫っているなかで、電気自動車等のハイテク技術に多くのお金と人材、資源を使用しています。一方、佐伯さんはローテクといった本来の技術の原点に戻ること、自国で賄えるシステムを考え、コストダウンを図られました。

日本には、有り余るほどの物があります。ローテクを駆使することで、環境にも配慮できます。地球に存在するすべての生物と共存共栄を図っていく上で、佐伯さんから学ぶことは数多くありました。



自然循環式トイレの水質検査 (クングムラン村)



ホイプム村の農業センター

### 「モン族の家にホームステイ」

今回のホームステイは、民俗学の学問的特質であるフィールドワークであると思います。多くの書物を紐解くよりも、自分の足で村を歩き、自分の目で村を見、自分の肌で人々の暮らしを体感することで言葉では伝えきれない多くのことを体験しました。言葉が通じないといったなかで本当に生活できるのか不安でしたが、人間とは不思議なもので言葉が通じなくても意思疎通が図れたことに物凄く喜びを感じました。また、異国の地から来たにも関わらず快く受け入れ、私のために精一杯の御持て成しをして下さり、その上、モン族の衣装も頂きとても嬉しかったです。そして、ホームステイ中、長時間移動することもありましたが、どんな時でも笑顔で接してくれたので、私も自然に笑顔になることができ、疲れを感じるどころか物凄く充実していました。今回、改めて私自身、モン族の人達のように何時でも笑顔を決やさない、温かい心を持った人になりたいと感じさせられました。



ホームステイ先での食事



ホストファミリーと

### 「シャンティ寮への訪問」

まず、私がシャンティ寮を訪問して驚いたことは、寮生全員に自主性が身に付いていたことでした。シャンティ寮はシャンティ山口と現地のタイ人の方々によって運営されていますが、寮生は自分達で話し合っ一日のスケジュールを決め、それを寮生が見えるところに貼り、その予定に沿って生活しています。また、学校から帰った後、毎日敷地内にある農場を耕したり、その他仕事を各自分担したりと本当に無駄の無いスケジュールで驚きました。私も含め、ここの寮生と同年代の日本の学生は家を離れ、何年もの間、共同生活をし、炊事洗濯含め色々なことを皆で分担、それ以外は勉強するといったことを何年も”続ける”のは難しいと思います。

なぜ、ここの寮生はこのようなことができるかという学校に通って勉強したいという意思がとても強いからです。ここにいる寮生にはタイの民族も多く、寮に入る前は家の畑の仕事を手伝うことが殆どで勉強なんてとてもじゃないですが、満足にできません。ですから、勉強したいという気持ちが強いと継続していけるのです。

日本には教育を受けられる環境が当たり前のようにありますが、全体的に見て日本の学生でここの寮生のように純粋に勉強をしたいと考えている人の割合は多くないと思います。

日本には、勉強嫌いや無理やり勉強をさせられている学生も多く、それを考えると物凄く情けないと思いました。僕は、勉強できる環境にいることを有難く思い、勉強をしたくてもできない人の分も頑張りたいと感じさせられました。

### 最後に

今回の体験で、自分の将来について改めて考えさせられました。佐伯さんのように現地の人達に慕われ、海外で活躍されている姿を見ることで日本人として誇りに思うと共に自分自身も海外で人の役に立ちたいと思いました。

これからも、広い視野で物事を捉え、知見を拡げていきたいと思います。

素晴らしい体験ができてよかったです。本当にお世話になりました。また、お会いできる機会がありましたら宜しく御願ひ致します。

## 『ホームステイ／スタディツアーに参加して』

徳島大学 医学部栄養学科 1年 荒木 迪子

今回、私は人生で初めて NPO というものの活動を目にしました。教科書やメディアからしか情報を得ることが無かったので、とても新鮮な体験ができたと思います。一連の体験を通して、自分の価値観や考え方を見つめ直す機会を与えてくれました。そして言葉を初めとした意思伝達についても、改めて思うところが生まれました。

エコトイレの活動を視察させていただいた事は、私は工学・化学的な分野を学んでいるわけではなかったのですが、視察を受けて、自分が学ぼうとしている学問における様々なことに疑問を持つことが必要であると学びました。例えば、実験においてあらかじめ試薬や条件が設定されている場合、そういった要因が設定されていることを鵜呑みにするのではなく、「なぜなのか」と疑問視すること。また、このように疑問視する努力を怠らないこと。常に目を凝らして、身の回りに起きていることについて疑問に思い、それを質問する、あるいはそれについて自ら深く考える。そういったことを今回、身を以て学習することが出来ました。勿論、エコトイレ自体にも感銘を受けました。日本では一見考えられないような構造をしたエコトイレとその後の経路ですが、実にうまく考えてあり、また、それも発展途上にあることに驚きました。貯水槽として4槽設けてありましたが、それぞれの温度や酸性度を測定し、今後エコトイレを作るにあたって、その槽を増やす必要があるか、減らすことができるか。どんな条件下ならば有機物を分解する微生物が最もよく活動するか。その条件をクリアするためにはどういった設備が要るのか。…槽を減らすことが出来れば、それだけ必要になる経費を浮かすことが出来、また有機物をより効率的に分解することが出来ればもっと安全な最終生産物としての水が生成できるとのことで、将来私自身が社会に出たとき、学んできたことを重視しすぎて頭でっかちにならないように、と一つ学ぶことが出来ました。単なる学問とは違い、社会に出れば、限りある資金や物資の中で最大限のものを作り出す工夫というものが必要であるのだろう、と感じました。



▲エコトイレについて説明してくださっている佐伯さん。今回のツアーを通して、エコトイレについては勿論、物事の観方なども多く学ばせていただきました。



▲一緒に遊んでくれた子たち。撮影は困難を極めました…。枠に収まらないくらい活発！

次にホームステイについてです。ホイプム村での2日間のホームステイは、初めてのホームステイだったということもあって、すべてが体当たりでした。それに加えて言葉が通じない、というのは、今振り返ると確実に障害になっていたな、と思います。勿論、言葉が通じないから諦める、ではどうにもなりませんから、身振り手振り、道具や絵を使って試行錯誤しました。少なからず助けになったのは、子供とのコミュニケーションがおる程度上手くいったことだと思います。少なくとも私はうまくいったものだと思います。

今回のホームステイは、モン語はおろか、タイ語の学習も準備のないままのものだったので、普通の言葉での交流は困難を極めました。でも、もしそういう状況に陥っても、身振り手振り、そして何よりどちらの国の言葉でも音を出すことで、コミュニケーションに彩りを加えられるんじゃないかという発見を、今回はしました。モン族のみなさんは私たちに興味を持ってくださいました。それも一つの救いだったと思います。タイ語すら分からない中で、日本語でもとにかく声にしてジェスチャーをして、自分が思っていることを伝えようとしなければ何も伝わらないことを学びました。



▲言葉は通じなかったけれど、デジカメやジェスチャー、単語と一緒に写真を撮ることが出来ました！

大学生としての生活はまだまだ序盤の私ですが、日本では経験することの出来ない環境を実際に体験することで、世界にはどんな環境で生活している人がいるのか、というリアルを知ることが出来ました。またそうした環境がある中で自分が大学生であること、これから専門性の高い分野を学問していくことを改めて認識しました。

勿論最先端の技術・知識を日々追いかけていくことと開発していくことも大切だと思います。それによって人の暮らしは確実に利便性を得ていくからです。しかし、その技術が生きるのは、日本や欧州のような先進国のみです。こうした発展途上の地域での知識の普及はまだまだなのではないかと思

います。発展途上の地域では物価や環境の先進国に比べての低さから、なかなか最新の知識などを実現できないのが現実です。こういった場合、高度な知識を得た人間は、自らの側のレベルを相手に押し付けがちです。そして無理を強いてしまっていることも少なくありません。村で視察させていただいたエコトイレは、原理自体はとても簡素で、一見誰でも思いつくようなシステムのように思いました。しかし、今まで誰もその原理を使おうと思わなかった。なぜか？最先端を追う人間にとって、ハイテクこそがエコ、という一種のエゴが存在するからではないかと思

います。高度な専門知識を大学で勉強することは有意義な事だと思います。一生懸命研究に打ち込むことも勿論大切で、それが新しい科学の扉を開けることになるかもしれません。そして世界に新しい技術や知識が生まれることはとても喜ばしいことだと思います。

しかしそれを現実の生活、様々な物価環境での実現をしようとするとき、必ずその物価に見合った機材での実現も行うことが出来る、そういう臨機応変に物事に取り組むことも視野に入れて、私は社会人になる必要があると感じました。大学で出来ること、社会人になったら必ず覚えておかなければいけないこと。それをエコトイレから学びました。

これから自分がどのような分野を研究するか、まだまだ定まっていないのが現実です。それでもいつか社会に出たときには、少なからずこのホイプム村での体験が自分の支えになってくれるものだと確信しています。最後になりましたが、NPOのみなさん、ホイプム村のみなさん、右も左も分からない私を温かく迎えていただき、本当にありがとうございました。日本ではできない体験でしたので、この先もずっと記憶に残っているいろいろな場面で生きてくると思います。そしてできれば、自分が一人前になったときには少なからず専門の面からみなさんの支援に参加したいと思いました。ほんとうにありがとうございました。

## 「シャンティ山口 活動現場 訪問レポート」

徳島大学 工学部 2年 永廣卓哉

今回北タイのホイブン村で二泊三日のホームステイをしたのでその体験について今から書こうと思う。まずホイブン村の位置を大雑把に言うと、タイ北部の山奥ということになる。観光でタイに来た日本人であれば、まず100%ホイブン村を訪れることはないだろう。

ホイブン村に向かう途中に車の荷台から見た植物は、葉っぱが日本のものよりも数段大きく、これぞ熱帯という感じがした。だんだんとホイブン村に近づいていくにつれ、道は日本では見たことがないくらい陰しく、細くなり、あたり一面が自然で覆われていった。本当に大自然がそのまま残っていたので、恐竜が生息していてもおかしくないなと感じるほどであった。それぐらい日本の自然と比べるとダイナミックで、あまり海外に出向いたことがない私にとってはインパクトのある光景が広がっていた。そんな山道を進んでいった先にホイブン村はある。

事前に村人の生活ぶりについてはとても苦しいと聞いていたので、村に着くとショッキングな光景が広がっているのかと想像していたが、最初はあまりひどい状況にある村だとは感じなかった。ホイブン村に何度も来ていて落ち着いた様子のスタッフが近くにいたということもあったのだろう。

村に着いた直後はこんなものなのかなと変に納得してしまっていた。そのため、この村の光景は貧しい村の光景なのだろうか、それとも海外の田舎の地域ではこういった村の光景は普通なのか、といったことがわからず、今一つ状況が飲み込めていなかった。

しかし、シャンティ山口のスタッフの話を聞き、村を見学していくにつれて、村人はなかなか大変な境遇にあるのだということがだんだん理解できるようになっていった。村人のホイブン村で生活することになるまでの経緯や、現在に至るまでのタイでの冷遇を知り、厳しい状況であると分かってきた。

ホイブン村に到着してしばらくの間はあまりひどい状況にある村だとは思わなかった。なぜそのような印象を受けなかったのか考えてみると、その主な理由としては次の二点が思い浮かんだ。

まず第一点目としては、シャンティ山口の介入により、以前に比べ、村の状況が改善されていたということ。これはあくまで想像であるが、シャンティ山口のスタッフの話を聞いているとそう感じた。

たとえば、私たちが昼食を食べていた木造の建物は、シャンティ山口が介入してから建てられたものだそうだ。このようにある程度村の雰囲気が変わったということがあるかもしれない。

次に第二点目としてホイブン村の村人が思いついた。村人の気質や姿勢が私に村が大変な状況にあると考えさせなかったのではないかと思う。日本の町と比べるとホイブン村には確かに何も無いし、現代の日本人はすごく不便な場所であると感じるだろう。ただ、そんな村の状況に不便を感じている村人はいるだろうか。不便を感じていたとしても切実にそういった村の状況を改善してほしいと願っている人はいるだろうか。そんなことをふと考えてみた。断言はできないが、少なくともモノがないことに不満を抱いている村人はほとんどいないと思う。村の子供たちは無邪気なかけ回り、大人たちは自分の仕事をこなしつつ、仲良く談笑する。このような光景がよく目についた。村人は私たち日本人が求めるような便利な機器などなくても現状に不満など感じていない。



ホストファミリーと私

だから私が村に到着してしばらくは、不便、大変であるといった印象をあまり受けなかったのではないか。ホームステイ期間中のことを振り返り、なぜホイブン村の第一印象が「貧しい」、「大変」、「苦しい」といったネガティブなものでなかったのか考えたとき、今述べたようなことが主な理由でないかと思う。現代の日本の多くの会社は世の中に便利で革新的な商品を送り出そうと躍起になっている。また、多くの日本人は新しく、便利で安い商品が発売されることを望んでいるかもしれない。

このように現代の日本は資本主義社会で、新しいものを売る、買う、ということが日々繰り返されている。言いかえると、日本では日々大量のエネルギーを消費し生産された新商品が売買され、まだ使えるであろうものも新商品に取って代われ、廃棄されているのである。

今回ホイブン村でのホームステイはこのような日本の社会システムを改めて見つめ直すいい機会となった。大量消費・大量生産の日本とは対照的に、ホイブン村ではいかに必要なものを身の回りの材料で安く簡単に作り、長持ちさせるかということがなされている。

特に、環境問題が注目を集めている現代では、私たち日本人にも多くを求めず、ものを大切に長く使うという姿勢は重要である。

今回のホームステイでそのような姿勢を学ぶことができたことはとてもいい経験であった。

ホイブン村でのホームステイ期間中はホームステイのほかにも、シャンティ山口の取り組みについて勉強することができた。

エコトイレの普及活動などシャンティ山口の活動を知ることができた中で、一番印象に残っている取り組みはアグリフォレストリー（持続可能な農業）を実現させるための活動である。

アグリフォレストリーを始めるにあたってはきっかけがあった。そのきっかけとは遺伝子組み換え（GMO）トウモロコシの栽培である。ホイブン村の GMO トウモロコシの栽培は 10 年以上前に開始されたのだが、現在ホイブン村では GMO トウモロコシの栽培が問題となっている。

GMO トウモロコシは遺伝子が組み換えられており、除草剤に耐性を持つ。そのため、除草剤が使用され一切の雑草が枯れた中でも GMO トウモロコシだけは枯れることなく育っていく。直観的にはトウモロコシの収穫量の増加が見込めるので GMO トウモロコシの栽培は良いように思えるかもしれない。

実際、1, 2 年目までは収穫量は多く、トウモロコシによる収入も多かったようだ。しかし、3 年目ぐらいから問題が生じ始めた。その問題とは、スコールのような大雨が引き起こす土壌流出による収穫量の減少、そして土壌流出に伴う健康被害である。ホイブン村のトウモロコシは山の斜面で育てられる。

そのため除草剤によって GMO トウモロコシ以外何も生えていない山の斜面では、スコールのような激しい雨が降ると土壌流出が起きてしまうのである。

土壌流出の結果、山の土地は痩せてしまい、栽培開始から 3 年目ぐらいから収穫量は減少し始めることになった。また、ひとたび除草剤を含んだ土壌が川に流入してしまうと、その除草剤がまわりまわって村人の体内に入り込んでしまう危険性がある。

悪いことに、GMO トウモロコシ栽培からしばらくして肺や関節の痛みに悩まされる村人が現れ始めた。除草剤が体内に取り込まれてしまったのだ。

このような大きな問題の解決策としてアグリフォレストリーが導入された。

アグリフォレストリーとは、ホイブン村の山に GMO トウモロコシの代わりに野菜、果物、穀物を少しずつ植えていき、持続可能な農業を実現しようという取り組みである。現在はホイブン村の山の斜面を利用して試験的に約 20 種類もの野菜や果物の栽培がなされており、それらの試験栽培がうまくいけば

本格的に栽培を開始するのである。

私はこの取り組みは素晴らしいと思う。話を聞くだけだと、GMO トウモロコシの代わりに別の種類の作物を育てようという発想は当然のことのように思えるかもしれない。しかし、これだけ大きな問題に直面した状況で解決策を導き出し、実施することは容易ではない。また、試験的に作物を育てるといってもなかなか大変な作業である。農業に関する知識も必要になってくる。

それにもかかわらず、健康被害などの問題が発生してからアグリフォレストリーという活動に着手するまであまり時間をかけていない。さらに特筆すべきは、活動におけるシャンティ山口の村人への気配りのきめ細かさである。

アグリフォレストリーの試験栽培について知っていく中で、私はシャンティ山口の村人への繊細な気配りを強く感じた。現在試験的に育てられている作物は GMO トウモロコシと違い、すべて毎年種ができる。(GMO トウモロコシは毎年種を購入する必要がある。) そのため新たな作物を育てようという時、苗を買ってひとたび植えてしまえば基本的にはそれでその作物の栽培はある程度軌道に乗る。しかし、シャンティ山口は苗を村の外から買ってくることをあまり望まない。これは苗の値段が高いからではない。苗自体は比較的安く、また作業としても苗を買ってきて植え付ける方が苗を一から育てるよりも簡単だそう。しかし、あえてシャンティ山口は苗を作るところから村人に作業してもらっている。

ではなぜ村人に苗を作らせるのか。それは村人に、作物に愛着を持ってもらうためである。苗を作るところから村人に作業してもらい、作物への持続的な愛着を持ってもらう。そうすることでそれ以後もその作物は大切に育ててもらえる。

つまり、シャンティ山口は村人の作物への愛着・愛情こそがアグリフォレストリーを実現させるための大きな要素だと考えているのだ。だからシャンティ山口は苗を村人に作ってもらうことを望んでいる。

アグリフォレストリーという活動を見学するなかで、私はシャンティ山口の支援される側へのきめ細やかな気配りを知り、自分もとことん相手の立場になって物事を考えることができるようになりたいなと思った。そうすればきっと周りの人と気持ちのいい関係を築くことができるだろう。

エコトイレの普及活動、山岳少数民族の学習支援などその他の活動についてもアグリフォレストリーと同様に、支援される側への思いやりが根底にはある。私はそこにシャンティ山口の魅力を強く感じる。

ただ施設やお金を与えるだけの支援とは異なり、村人の自立を支援する。そこがシャンティ山口の素晴らしいところであり、国際的なボランティア・支援のあり方の一つであると思う。ホイブン村でシャンティ山口のスタッフと行動をともにし、ホームステイをさせてもらえたことは私にとって貴重な体験であった。その間、村人もシャンティ山口のスタッフもすべての方が私にやさしく接してくれたことはとてもありがたく、一生の思い出である。

—永廣卓哉—



—環境衛生活動募金にご協力をお願いします。—

2012.04.20saeki